

戒厳令下の台湾で1985年、野党活動家だった陳水扁・現総統の夫人、呉淑珍さん(50)は、不審な「交通事故」で瀕死の重傷を負い、現在まで18年間、車椅子での生活を余儀なくされた。政治的な重圧が続く当時、懸命の治療で夫人の一命をとりとめた外科医がいたことは、あまり知られていない。その外科医、国泰総合病院の陳楷模院長(74)に治療当時の“秘話”を聞いた。

在野政党だった民進党の候補として台南県長選に立候補した陳氏。落選し、支援者挨拶に出かけた1985年11月18日に事件が起きた。一行に車が突っ込み、さらにバックして体当たりした。陳氏に怪我はなかったが、呉さんが重傷を負い台中の総合病院に運ばれた。事件の真相は、いまま明らかにされていない。

呉さんは首の低い位置にある第七頸椎と第八頸椎の複雑骨折で首から下がマヒ状態で呼吸困難も起き、当時は台湾大学付属病院で外科部長だった陳院長に、呉さんに近い筋から治療依頼があった。陳院長は「病院長などが(民進党を狙う政治弾圧を)心配したが、私は即座に(呉さんを)連れてきなさいと言った」。当時、病院でも国民党体制の末端に連なる内部の監視部門「人事室第二課」が医師ら職員の思想動向をチェックしていた。

事件から4日後の22日に、台中から届いたカルテを見ながら呉さんを診療して陳院長は驚いた。「これは見殺しにするつもり治療だ」。頸椎骨折の場合はまず頸椎が動かないよう左右を固定するのが原則だが、頸椎間をハリガネで結ぶだけの簡単な処置で、首はグラグラのまま。「最初の医師は形だけ手術したが、正しく治療しないことで(政治弾圧から)自分を守ろうとした」と陳院長は考えている。

政治弾圧の危険と背中合わせの治療だったが、あえて引き受けた理由を陳院長、「16歳まで日本人として育った精神がある。独裁政権に敢然と立ち向かった民進党の勇士を助けたいという気持ちが強く、万一のときは自分が捕まる覚悟だった」と振り返る。

陳院長の外科チームはすぐに呉さんの頸椎を固定。ICU(集中治療室)で体調回復を待ち、12月19日に手術を行った。呉さんに下半身不随は残ったが、一命は取りとめた。「最初の病院で正しい治療さえしていれば、下半身不随にもならなかつたらう」という。

陳総統は就任直後に招かれた台湾大学講演会の席で、「呉淑珍がいなければ私が総統になることはなかった」と述べ、85年の事件と陳院長の治療を初めて公開した。呉さんは「車椅子のファーストレディ」となったが、昨年9月の訪米など積極的な活動を続ける。今月15日からは「故宮収蔵品展」開幕式のためドイツのベルリンを訪れる。